

0. 07 / 宝クジが当たった男!

竹村直久

登場人物

高木	好介	(36)	パソコンメーカー社員
齊田	公平	(46)	同 高木の上司
貝	梁子	(29)	同 OL
時川	真紀	(23)	同 OL
武崎	啓一	(31)	パソコン卸業者
近江	芯	(48)	パソコン販売業者
中泉	瞳	(26)	クラブホステス

N 「時に西暦二千エックス年。日本の宝クジ法が改正され、その年の当選金額はその年の宝クジの売れ行きにより上下するシステムが採用されることになり、その最高当選金額は50億円に制定された。そして、今年の一等当選金額は42億円であった」

舞台は倉庫の一室である

上手にドアがある

それ程広くもなく、殺風景で、隅の方には訳の分からないガラクタが散らばっている

壁には外に通じているらしい電話機がある

下手の壁際に脚付の大きなホワイトボードがある

ドアからスーツ姿の斉田公平に続いてOLの制服姿の時川真紀と貝梁子が、大きな、重そうなダンボー

ル箱を一つずつ抱えて入って来る
梁子は左手首に包帯を巻いている
箱にはSLAVE2000と印刷されている
3人とも汗をかいてフラフラである

斉田「ちしよう、やっぱりないかもう、東京ビジコン販売さーん、東京ビジコン販売さーん！」

辺りを見回しながら箱を床に置く斉田

真紀が床に箱をドカッと落とす様に置く

斉田「コラ！ もっとそーっと置きなさいよそーっと！ 一台二百万円もするコンピューターなんだよ」

ブスツとして斉田を睨む真紀

斉田「もし壊れでもしたら弁償出来るのか君」

真紀「出来ません」

斉田「だったらもっと丁寧に扱いなさいよ丁寧」

真紀「（慚然と）すみません」

斉田はよろけている梁子の手からあわてて箱を受け取る

斉田「貝君、大丈夫かい、すまないね、重たい思いさせちゃつ

て、後でケーキでも「ちそうするからね」

真紀「もちろん私にもですよね課長」

斉田「ハイハイ分かってますよ、だけどね、一コだからね一コ、バカみたいに二つも三つも食べられたんじゃこっちはかなわないからね」

真紀「いーですよーっで！」

斉田「貝君なんか食べるって一つしか食べられないよなア」

梁子「・・・」

斉田「普通はそうだよ普通の女性だったら」

真紀「すいませんね、私は普通じゃなくってえ」

斉田「とにかく早く、全部運ぶんだ」

斉田は次の箱を取りにドアを出て行く

真紀「もう、何で私たちがこんな思いしなきゃならないのよ」

と真紀、梁子も続いて行く

また次の箱を持って入って来る斉田

斉田「クソウ、高木が全部悪いんだ、あのバカが、あいつが時間間に合わないから悪いんだ。大宮工場と間違えて、所沢なんかに取りに行きやがって、あのタコが」

続いて箱を持って入って来る真紀と梁子

真希「そもそも課長が高木さんなんかこんな大事な仕事まかせるのが悪いんですよ、だいたいおバカの高木さんがまともにこんな仕事出来る訳ないじゃないですか」

斉田「今回は初めてあいつが取ってきた契約だから、しっかり最後までやらせてみようと思ったのが私の間違いだった。あのドスバカ野郎が、だからあいつは結婚も出来ないんだ」

持って来た箱を積み上げて行く3人

そこへ慌てふためいて駆け込んで来る高木好助

高木「申し訳ありません！ 本当に申し訳ありません」

顔をクチャクチャにして半ベソをかいている

斉田「お前なんかドブにはまって死んでしまえ！」

高木「（泣く）今どきドブなんかありません」

斉田「口答えするのか！」

高木「いいえめっそもごいません」

斉田「いいから早く！ コンピューターを運べ！」

高木「はっ、はい！」

と外へ走り出て行く

斉田「あのクソバカが」

と続いて行く3人

箱を持って入って来る高木

続いて斉田、真紀、梁子

高木「あの、東京ビジコン販売さんは？」

斉田「何所にもいないよ、いる訳ないよ、怒ってとっくに帰っちゃってるよ「こんな時間じゃ」

高木「すいません」

斉田「君は先方の連絡先知らないのかね、ちょっと電話して聞いてみなさいよすぐ！」

高木「はい」

と携帯電話を出して手帳を見ながらダイヤルするが

高木「ダメです、通じません」

斉田「全くもうー、この役立たずがあ」

と高木の後ろ頭をひっぱたく

高木「アーツ！ コ、コンタクトがあ！」

斉田「何い」

あわててかがんで床の上を探す高木

斉田「そんなモノ探してるヒマはない！」

と高木の前を踏みつける様にしてダンダン跳びハネる

高木「うわー両方いつぺんに飛んじやったのにい」

斉田「いいから早く運ぶんだ」

高木「ええーこれじゃ何も見えませんよ」

斉田「手探りでやれ」

高木「そんなあ・・・」

斉田「（皆に）私はちょっとその辺東京ビジコンさんがまだいないか探して来るから、「こ」やってなさい」

高木「はい」
真紀「は〜い」

齊田出て行く

高木次の箱を取りに出て行くこうとするが、見えないらしくドアにぶつかると

高木「あいたっ」

真紀「ハアやってらんない」

と座ってタバコに火をつける

真紀「先輩もう手伝うことないですよ、あんなバカの為に」

梁子も疲れてそばに座る

ふうふう言いながら箱を持って来る高木

真紀「高木さんもうあと一人でやって下さいね、やってらんないですよもう、こんな重たいの」

屈辱に耐えて次の箱を取りに出て行く高木

梁子「何だか可哀そう」

真紀「いいんですよあんなのやらしとけば、だって自分が悪いんじゃないですか、なんで〇〇の私たちがこんな肉体労働しなきゃならないんですか」

梁子「・・・」

真紀「あ、先輩何時？」

梁子「(時計見て)二時過ぎだけど」

真紀「あ、宝クジの当選番号聞かなくちゃ」

と急いでポケットから10枚の宝クジ券と携帯電話

を出し、ダイヤルする

真紀「先輩、番号言うからメモってもらえます」
梁子「あ、うん」

梁子、急いでポケットからメモとペンを出す

真紀「（携帯を耳にあて）一等、42億円は・・・九十四組の、
二十六万七千三百二十五番・・・」

メモする梁子

真紀「二等、一億円は各組共通三十万四千七百十二番、三等一
千万円は、各組共通下五ケタ、八万四千六百十四番、四
等百万円は下四ケタ、一千二百六十五番、五等十万円は、
下三ケタ、三百十七番」

真紀は携帯を切ると梁子を書いたメモをひったくり、
凄い速さで自分の持っている券と一枚一枚照らし合
わせる

その間高木は一人でフラつきながらコンピュータ
の箱を運び込み続ける
アツと言う間に10枚の券の番号を見終わる真紀

真希「何だよーちくしょーバカにしゃがって（券をバラまく）
一枚も当たってねえよー、十万円くらい当たれよバカや
ろー！」

メモ紙を丸めて投げ捨てる

梁子「残念だったわね」
真紀「ハァーアァ先輩、何か良いことないですかねえ、あ、そ

うだ斉田課長の件、どうなりました？」

弾かれた様に立って背を向ける梁子

梁子「・・・さあ、まだ向こうから何も言っていないから・・・」

真紀「まったく斉田課長ったら、本当に私には冷たくて先輩に

はやさしいんですもんねエ、あんなにあからさまじゃ誰

が見たって課長と先輩が出来てんの分かつちゃうのに」

梁子「しっ、ちょっと、そんなに大きな声で言わないでよ」

真紀「大丈夫ですよ、どうせバカ高木なんか聞いたってどうも
なりやしないんですから」

梁子「・・・」

左手首の包帯を取ろうとする梁子

真紀「あ、先輩なんで包帯取っちゃうんですか（と止める）」

梁子「だって、もう全然たいした事ないんだもん」

真紀「ダメですよ、まだしての方が課長だって絶対プレッシャ
ーかかっているんですから」

梁子「でも、なんだかこれみよがしにしているのもなんか」

真紀「何言ってるんですか、先輩が自殺未遂したのは本当の事
じゃないですか」

梁子「でも、ちょっと血が出ただけだし、もうほとんど直って
るの」

真紀「ダメですよ」

梁子「でも、何だか嘘ついてるみたいで」

真紀「嘘ついてるのは課長の方でしょう」

梁子「・・・」

真紀「先輩、絶対負けちゃダメですよ、私がついてますからね
！」

梁子「う、うん（寂しく笑う）だけど・・・」

真紀「えっ」

梁子「課長は本当に私のこと、ただの遊びだったのかしら……」

真紀「そんな、ダメですよ情にかられちゃ、男なんか皆遊びに決まってるんですから、ましてや課長なんて奥さんや子供もいるクセに」

梁子「うん……だけど、あの時はあの人、あの時だけはあの人、私に対して本気だったんじゃないかって思うのよ」

真紀「ダメですよ先輩、女は弱いから、皆そう思うけど、絶対ダメですよそんな風に思っちゃあ、そう思ったら負けですよ」

梁子「でもあの時……」

真紀「月曜日の残業ですよ、二人以外に誰もいなかった営業2課の会議室では、課長の斉田と部下の〇〇梁子による、あられもない痴態が繰り広げられているのであった、アッ！ 課長ダメです、梁子君、私はキミが……29

歳にして始めて男に刺し貫かれた梁子は、まるで断末魔の様なおたけびをあげて、キヤーツ……」

梁子「やめてえーっ！（耳を押さえる）キヤーツ……」

頭を抱え込んでしまう梁子

真紀「……あーあそれにしても宝クジ当たらないかなあー、42億円、ねえ先輩、もし42億円当たったらどうします？」

梁子「……さあ、だってそんなの当たる訳ないもの」

真紀「そんなあ！ そんな夢のない事言っちゃダメですよ、いくら確立が低いからって、誰か当たる人がいることは確かなんですから、それが自分じゃないとは言いきれないじゃないですか」

梁子「うん……それはそうだけど、でも夢を託すにはあまりにも低い確率だわ」

真紀「私当たったら誰にも言わずに突然何処かへ姿消すんだ、

だって今までに宝クジの当たった人の話聞くと、当たったとたん到现在まで自分の知らなかった様な親戚までが押し寄せてきて、結局皆にお金貸してあげたら、当たったお金が全部なくなっちゃったって言いますからね・・・私ある日突然会社に来なくなるんだ、借金も全部返して、もう性風俗でバイトしなくてもいいんだあ。なんだか最近、私の人生って借金を返す為にあるみたいな気がして、何か虚しいんですよ・・・先輩知らないだろうけど、フェラチオってすごいアゴが疲れるんですよ、あ、もう課長のポコチンで経験したかあ、あっハハハハハ・・・」

高木が箱をかかえて入って来る

梁子「やめてよそんな話！（耳を塞ぐ）」

フラフラになりながら箱を置く高木

高木「はあっ、はあっ、やっと終わった」

真紀「それで終わりですか高木さん」

高木「ああ・・・（とへたり込む）」

真紀「（バカにして）全く御苦労サマでしたっ」

高木「・・・」

真紀「高木さんは宝クジ買わなかったんですか？」

高木「えっ？宝クジ？（何故かムキになり）宝クジなんか一枚も買うもんか！今まで一度だって宝クジなんか買ったことないぞ僕は・・・」

真紀「・・・そうですか」

そこへ斉田が入って来る

斉田「ちくしょう、やっぱり怒って帰っちゃったのかも知れな

いなあ、まったく君って奴は、だいたいこの時の約束が2
時にもなって、待ってる訳がないじゃないか、なあ」
高木「本当にどうも、とんだ失敗をしまして、申し訳あり
ません」

と土下座して頭を下げる

斉田「全く、君にしては始めての大口の契約を取って来たと思
ったらこのザマだ、一体何回上司としての私の顔に泥を
塗ったら気が済むのかね！」

高木「はっ、面目次第も」ぞいません」

斉田「もういいよ！ ちょっと皆そのへん手分けして探してみ
てくれよ、連絡つかないから」

高木「はいっ」

全員、ドアを出て行く

ドアを開けてこっそり一人だけ戻ってくる高木

辺りを見回すとポケットから宝クジの束(3百枚)
と携帯電話を取り出す

券を見ながらダイヤルし、耳にあてる
当たり番号を聞きながら券の束の番号を見て行く、
しばし夢中になる、そして、ハッとする様に表情が
変わる

券の束の中から一枚を取り出し、目を細めて見る
目をひんむいて驚き、電話を切って再ダイヤルする
目を細めてクジの番号を確認する
そして息をのむ

高木「ア・・・アッ!・・・アア・・・!」

声が出ない

高木「ああ！・・・」

もたえる

ドアを開けて中をうかがう様にして武崎啓一が顔を
出す

武崎はスーツを着ている

武崎「あっ、高木さん！」

ビクリとして券の束を内ポケットに隠す高木

武崎「高木さん、今何時だと思ってんですか、カンベンして下
さいよう〜」

高木「ふわあ、ふわああ、あひやうう・・・」

話そうとするが言葉にならない

武崎「荷物は？ 商品はちゃんと持って来たんでしょうねえ」

頷く高木

そこへ斉田と真紀と梁子が入って来る

斉田「あっ、あなた、と、東京ビジコン販売さんですか？」

武崎「そうです（怒ってる）」

斉田「いや、この度は誠に申し訳ありませんでした、このバカ
が、いや高木がとんだ失敗をいたしましたして、あ、始めま
して、私課長の斉田と申します」

と名刺を出して武崎に渡す

斉田「本日の納品の品物は我が社の大宮工場から集荷する予定
だったものを、この者が間違えて所沢へ取りに行っ

まったものですから、こうして女子社員まで動員して我々があわてて大宮の方から集荷して来た次第でありまして」

武崎「そんな言い訳はもういいですから、トラックの方へ早く運び出してもらえますか、買い付けに来てる業者さん、今日中にトラックで九州に運ぶ予定だったんですよ、今からじゃ間に合わないじゃないですか」

斉田「いや、本当に申し訳ない、すぐにあの、運びますので、あの、車の方は何所に？」

武崎「この時に来たって誰もいないからさ、表にトラック置いとく訳にもいかないし、大通りの方に出て待ってたんですよ、業者さんと二人で」

斉田「いや、本当に申し訳ない、すぐに皆で運びますので」

武崎「アンタたち、これ気付かなかったんですか？」

と隅のホワイトボードを指差す

ボードには大きく「表通りのトラックで待っています。東京ビジコン販売」と書かれている

斉田「はあ、すいません、皆夢中になって運んでいたものですから」

武崎「じゃとにかく今皆一つずつ持ってついて来て下さい、トラックのとこまで案内しますから」

斉田「あ、あの、恐縮ですが、例の、前金の方は？」

黙ってポケットから分厚い紙包みを出して斉田に渡す武崎

斉田は中身を出して見る、五百万円の札束である

斉田「よし、じゃあ皆、もう一度一つずつ持って、武崎さんの後に付いて行くんだ！」

真紀「えーまた持つんですかあ、もうトラックこっちに回して

もらえばいいじゃないですかあ」

斉田「いいーから、皆文句言わずに一つずつ持ちなさい」

また皆箱を一個ずつ持ち上げる

真紀「後でケーキですよお、もう」

武崎に続いて箱を持って出て行く斉田、真紀、梁子、
だが高木は箱を持って最後に一緒に付いて行くフリ
をしつつ、ドアから出ずに残る

そして皆が行ってしまったのをよく確認すると、持
っていた箱を下へ降ろす
ドアに耳をあててみる

高木「おーい！」

耳をすます

高木「おーい！」

耳をすます

高木「王様の耳はロバの耳〜！」

しんとしている

高木「ふふっ・・・ふふふふっ・・・バカ臭え！ やってられ
っかこんなものおー！」

降ろしたコンピューターの箱を持ち上げて放り投げ
る、ガシヤンと音がして中身が壊れた様子
積んである箱の山を次々に放り投げる、ガシヤンガ

シャンと中身の壊れる音

高木「何が二百万円のコンピューターだ！ こんなもの、壊しちゃえ、みんな壊しちゃえ、わーっはっはっはっ！ 見たか（券を出す）42億だ・・・42億円当たったんだ！ オレは億万長者だあーうわあー42億だ、42億円だーうひゃあああああ〜」

半狂乱になってコンピューターの箱を投げまくる

高木「二百万なんかこんなモノ42億に比べりゃハシタ金だ！ 壊しちゃえ、みんな壊しちゃえ！ オレはもう一生働かなくていいんだザマーみろー！・・・はっ、待てよ、宝クジの当たったことが分かったら、皆にたかられてなくなっちゃうぞ！ そうだ、秘密にしなきゃ、何もなかった様な顔をして、明日から突然会社に来ないんだ、最初

は皆、オレのことなんか気にしてないけど、3日4日と経つうちにおかしいなあと思いはじめて、でもその頃にはもう家に電話したって通じないんだ、その頃オレはハワイでバカンスだ！ 金髪女はべらしてトロピカルドリンクだ、わあーあああああ・・・」

高木はあわてて散らばった箱を元の様に積み上げる

高木「今だけバレなきゃいいんだ、後のことはオレはもう知るか、へへっ、みんな壊れてっぞ、課長の野郎、怒られて吠えヅラかくぞ、うわーっはっはっはっ・・・」

元の通り箱を積み終える

高木「そっだ、瞳、瞳を連れて行こう、明日からハワイだ」

携帯を出してダイヤルする

高木「あ、瞳？ 起きてたかい？ オレだよ、高木好助、実はね、すごいことになったんだ、えっ？ 今？ うん、仕事中だよ、でももう明日から働かなくてもいいんだ！ えっ？ ハワイに行くんだ、誰とって瞳と一緒に決まってるじゃないか、いいか、もうお店になんか出なくてもいいんだよ、オレも会社なんかやめちゃうよ、当たったんだよ、宝クジ！ 2億円が当たったんだよ！ 本当だよ信じられないよオレだって！ いいかい、誰にも言っちゃダメだよ、だから早く、荷物をまとめるんだ、オレは今日何もなかったフリをして会社から帰るよ、でももう二度と会社に出て来ることはないんだ！ もう誰もオレの姿を見る事はないんだ！ ハハハ・・・もう一生遊んで暮らすんだ、そーだよ瞳と、一緒にハワイに高飛びだウオーツ！（物音に気付き）待って、連中帰って来た、

うん、また連絡する」

とそそくさと携帯を切る

近江芯を連れて入って来る武崎、斉田、真紀、梁子。

芯はセーターを着て下は作業着の様なズボンをはいている、割とラフな格好

斉田「（高木を見て）キサマー一人でサボってたあ！」

と飛び蹴りをくらわせる

スッ飛び高木

高木「すみません、腰が痛くってえ」

と腰をおさえる、高木は一見悲痛な表情をして斉田に詫びている様だが、時々隠しきれない笑顔があふ

れ出てしまっ

齊田「何を言っているんだこの大バカ者が、君のおかげでどれだけこの方に御迷惑おかけしたと思ってるんだ、土下座してお詫びしなさい土下座してっ」

と高木のえり首をつかんで芯の前に座らせる

芯「まあまああなた、何もそこまでしなくてもいいじゃないませんか」

芯は少し酒に酔っている

齊田「いえ、すべてはこの者の責任ですので、本当に申し訳ないことを致しました、コラー… あやまれー!」

高木「ごめんなさああくい（バカにした様に両手をついて頭を

下げる）」

齊田「こんのヤローツ（逆上する）」

芯「まあまああなた、いいじゃないですか、ま、これから急いでトラックに積んで夜通し走れば朝までには大分へ着きますよ」

齊田「本当にどうも、あいすみません、私どもの不手際で、この様な事態になってしまいました…」

芯「まあ、くよくよしても始まりません」

高木「そうそ、くよくよ言いつこなし!」

齊田「お、お前が言うなお前があ!」

と高木の胸ぐらをつかんで引っ張り回す

芯「まあまあ落ち着いて」

と止めに入る芯

芯 「さあ、手分けして早く荷物を運んじやいませうか」
齊 田 「はい、ありがとうございます、さあ皆！ 急いで商品を
トラックに積み込むんだ、さあ」

―同箱を持って運び出すとする、その時中が壊れ
ているのでガチャガチャ音がする

芯 「ん？ 何かコレ今ヘンな音がしたなあ」

と箱を置き、フタを開けてみる

芯 「アレ？ 何だこれ、モニターの画面が割れてるじゃない
ですか」

齊 田 「えっ？」

と芯の開けた箱の中を見る齊田

齊 田 「あれえ、何だこれ」

高 木 「すみません、さっき私が落としちゃったもんですから」

齊 田 「何だと（怖い顔）」

真紀が自分の持っていた箱を開く

真 紀 「あ、課長、これも割れてますよ」

齊 田 「何い？」

高 木 「すみません、落っことしちゃってえ」

謝りつつもニヤケてしまう高木

茫然としている齊田

高 木 「クビですよね、私はもうクビですよねえ、さよならあ！」

とドアを走り出て行くとする

芯 「待てコラァ！」

と急に大声で怒鳴る

高木 「（驚き） なっ、なんですか」

芯 「おい、これお前、中身が違うじゃないかよ」

高木 「えっ？」

芯 「これはスレーブ二千じゃないじゃないか」

高木 「えっ、そんな、知りませんよそんなの」

芯 「デメエ騙しやがったな！」

斉田 「芯・・・」

高木 「か、課長、どういことですかこれは？」

斉田 「た、高木君！ 君は中身をすり替えたのか！」

高木 「僕がそんなことする訳ないじゃありませんか！」

斉田 「じゃあ他の誰がやったって言うんだ、コラ、答えなさい、

本物のスレーブ二千は何所へ持って行ったんだ！」

高木 「そんなこと知りませんよ！」

芯 「デメエ、オレを騙しやがったな、クソウ、ブツ殺してやるー！」

いきなり懐からドスを抜いて高木に斬りかかって行

く芯

梁子 「キヤーツ！」

武崎 「よせっ、やめる芯さん」

とっさに芯をつかんで止める武崎

斉田 「なっ、何なんですかこの人はあ」

芯 「オレはなあ、どうしても生かしちゃおけない奴がこの世に一人いるんだ、それはなあ、オレから商品騙し取ってオレの会社潰した野郎だ、見つけたらいつでも殺せるよ。うにこうしていつでもドスを持ち歩いてるんだ、だがなあ、そいつじゃなくてもお前みたいな悪党はオレは許せねえんだあーうおーっ！ 放せコラー！」

武崎 「よせっ、バカはやめろって芯さん！」

武崎の腕を振りほどこうともがく芯

芯 「放せっ、この野郎騙しやがって」

斉田 「(ビビって) 悪いのは全部この男です、どうぞこの男を好きな様にして下さい」

と高木を差し出す

高木 「(恐怖) 知りません、僕は何も知りませんよ」

武崎 「おい斉田さん、とりあえずさっき渡した前金の五百万は返してもらおうか」

斉田 「……」

武崎 「さあ、早く返して下さいよ！」

斉田 「……」

芯 「どう言うつもりだお前、さっさと金返せよ！」

斉田 「いや、あ……あのちょっと待っていただけませんか、代わりの商品は、必ず近い内にお納めさせていただきますので」

芯 「何が近いうちにだよ、現にこのパソコンはニセモノじゃねえか、すぐ返せ、この取り引きはもうやめだ」

斉田 「いや、それはあの、お願いします、少し待っていただけないでしょうか」

芯 「何が待てだ、今そこに持ってんじゃねえか、返せこの！」

武崎を振り切って斉田に斬りかかって行く
寸での所で芯を捕まえる武崎

斉田「うわあっ、助けて下さいっ！」

芯「お前ら二人グルでやったんだろう！ こいつっ、殺してやるー！」

武崎「やめろって芯さん」

と芯を止めて引き離す武崎

斉田「あ、あの、こう言っっては何ですが、あなたたちだってあの、人に知られちゃならない素性と言っモノがあるんじゃないでしょうか」

芯「何だとコラ！」

斉田「いえ、ですからあの、少しだけ待っていただけないかと申し上げているんです」

武崎「おい、ちょっと待てよ、何がオレたちの素性だよ、アンタそれでオレたちの足元見たつもりでいるのかよ、えっ、そんなこと言っつとオレだってアンタの企みここでバラすぞ」

真紀「なっ、何ですか課長の企みって？」

武崎「アンタの言っつオレたちの素性ってなあオレがパクリ屋だっつことだろう」

真紀「パクリ屋って何ですか？」

武崎「メーカーから商品を購入するだけ納めさせといて、後で金を払わず商品を持って逃げてしまっ悪い奴のことさ」

真紀「あなたたちがそうだっつて言っつんですか？」

武崎「そっつだ、でもこの人はそれを知っつてわざとオレたちとの契約を交わしたんだ」

真紀「えっ、それっつてどう言っつことなんですか？」

武崎「つまりこの人は、ハナからオレたちに商品騙し取られるのを分かって高木さんに契約を取らせしたんだ」

真紀「そんな、何でそんなこと」

武崎「さっき渡した五百万円の為だ」

真紀「そんなあ（斉田を見る）だ、だけど今回の契約は高木さんが一人で取って来たんじゃないですか」

武崎「そうだ、高木さんは斉田課長にハメられたんだ、オレたち騙されて商品を取られたことの責任を全部高木さんに負わせて、クビにする為に」

真紀「だけど、そんなの、どうやって・・・」

武崎「高木さん、オレを最初にアンタに紹介したのは誰だった？」

高木「えっ・・・それは、瞳です」

武崎「そう、六本木のクラブ、エリートキラの瞳だろう、だがそのエリートキラは昔から、斉田課長の行きつけだった」

高木「はい、私は確かに、斉田課長に、昔からの行きつけだった意うエリートキラに連れて行っていただいて、それ

から一人でも時々行く様になって、そして瞳と知り合い
ました、でもそれが何か」

武崎「まさしくアンタはバカだなあ、ここまで話を聞いてもまだ分からないのか？」

高木「は？・・・な、なんででしょう」

武崎「つまり、斉田課長はオレたちがパクリ屋だと言うことを知ってて、わざと瞳を通してアンタにオレを紹介させた、アンタにしてみれば初めて自分で取り付けた大口の契約だと思って、喜んでオレの話に飛びついた。でもそれもこれも全ては斉田課長の仕組んだ事だったんだ」

斉田「もういいでしょう武崎さん！ やめて下さい」

武崎「じゃあ今すぐ五百万円を返せ」

斉田「・・・・・・・・・・」

武崎「・・・つまり斉田課長は、ハナからパクリ屋と知ってて高木さんに取り引きの契約を取らせ、オレたちからは礼金として五百万を受け取って、後の責任は全て高木さん

に取らせるつもりだったんだ」

梁子「そんな酷い！ 課長は本当にそんな酷いことしたんですか」

斉田「ま、まあ待て貝君、これにはいろいろ事情があつてだねえ……」

梁子「あなたはそんなに酷い人間だったんですか！」

斉田「貝君！ 待て、私の話を聞くんだけ」

梁子「話なんか聞きたくないわよ、あなたなんか！」

梁子の肩を抱いて言いくるめる様に小声でヒソヒソ

話す斉田

最初は抗っている様子だが、徐々におとなしくなる

梁子

斉田、皆の方に顔を上げる

斉田「……私は本当に、今頃はとっくに役員になつてもお

かしくなかつた人間なんだ、それを、この高木の度重なる失態にどれだけ邪魔されて来たことか、私は全く、こいつのおかげで……」

武崎「でも斉田さん、今回は失敗したんだ、高木さんをクビにするついでにオレたちも騙してまんまと五百万をせしめようと思つたんだらうけど、もう商品がニセモノであることがバレちゃつたんだから今回はあきらめるしかないだらう」

斉田「くっ……くそ、お前（高木）がちゃんと大宮工場へ行って、時間通りに納品してさえいれば……」

武崎「あんたはこの人のバカさ加減を考えに入れるのを忘れてたんだ。もうどうにもならないだらう、斉田さん」

斉田「……」

苴「おい、何とか言えよコラア！」

斉田「お願いです、聞いて下さい！」

バツと土下座する斉田

斉田「すみません、アナタたちを騙そうとしたことは謝ります、
実はすぐ金があるんです、取り引き先から不渡りをつか
まされて、今日明日中にどうしても七百万円用意しない
と我が社は倒産してしまうんです！」

真紀「ええっ！」

芯の動きが止まる

芯「何だと？」

斉田「すみません、実は先頃倒産した豊丸電気に千二百万程の
コゲつきがありまして、会社のかかえる負債の返済の期
日が迫っているのに、今だに返済のメドが立っていない
んです」

高木「・・・か、会社が潰れるかもしれないんですか課長」

斉田「そうだ・・・」

高木「ぶっ、ぶはははは（爆笑）あはははははは・・・」

斉田「・・・ついに気がふれたのか」

芯「それで、その五百万があれば間に合うって言うのか？」

斉田「はい、それは、なんとか、この五百万さえあれば・・・」

武崎「何言ってるんだよそんなのダメだよ、そんなこと言ってた
ら切らないよ、現に商品はニセモノだったんだから金返
せよ、会社なんかどうやったって潰れる時は潰れるんだ
からしょうがないだろうっ！」

芯「・・・」

黙ってドスをサヤに納める芯

武崎「（芯の顔を見て）おい芯さん」

武崎の腕を振り払い、ポケットからウイスキーのミニボトルを出してグビグビッとラッパ飲みする芯

芯 「(急に落ち着いて)・・・斉田さんな、オレな、オレもな、実はこの前まで販売じゃなくて卸しの方の仕事やってたんよ、でもな、この武崎さんの同業の人に騙されてな、卸した品物だけ取られてお金払ってもらえなかったんよ、オレもな、実はな、あんたからこの新型のコンピューター卸してもらって余所へ売りさばいて稼がんと、残った負債を返しきれないのよ」

斉田「・・・・・・・・」

一同の緊張した雰囲気

高木「あのく私、いずれにしても、クビですよね、クビ、それじゃあの、そう言う訳で、私消えますので、サヨナラあ

・・・・・・・・」

と、そつとドアに向かって駆け出す
ドアを開くとそこに中泉瞳が立っている

高木「あっ、瞳！」

瞳 「(見る)」

瞳は今から高級クラブへ出勤すると言った感じの、清楚だが鮮やかなスーツを着て、シャープなメイクでハードボイルドな雰囲気を漂わせている

高木「どうして?・・・よくここが分かったね、さア、一緒に行こう！」

と瞳を連れて出て行こうとするが、瞳は高木の手を

振り払って武崎のそばへ行く
後を追って来る高木

高木「おい、瞳、どうしたんだよ」

武崎に何か耳打ちする瞳

武崎「（聞いて）ふんふん・・・（目が輝く）本当か？」

頷く瞳

武崎「高木さん、アンタの買った宝クジで2億円が当たったって言うのは本当か？」

ギョツとして後ずさる高木

一同「ええっ？」

高木を見る一同

高木「瞳っ！ バカ、何で言うんだよそんな奴に」

瞳のそばへ来る高木

高木「さあ、早くこんな奴等はほっといいて一緒に逃げよう、オレと」

と瞳の手を取る

瞳は手を引っ込めて武崎の背後に立つ

高木「どうしたんだよ瞳！」

斉田「まったく君はおめでたい男だ、まだ分かってないのか！」

高木「(キョトンとして)何が?」

斉田「君は騙されてたんだよその女に」

高木「ヘッ?(バカ面)」

斉田「君のそのバカ頭でよく考えてみる、そもそもこの取り引きの話を君に持ちかけて来たのは誰だったのかね」

高木「・・・瞳、(微笑み)オレがいつも、上手く行かない仕事のグチばかり言っていて可哀そうだからって、私

が大口の販売会社の人紹介してあげるって・・・」

斉田「その紹介されたのが武崎さんだろう」

高木「ええ・・・」

斉田「この人は瞳さんとは同郷の出身でパクリ屋だ、瞳さんはそのことを知ってお前にこの人を紹介した」

高木「・・・」

斉田「よく自分のバカ面を鏡に写して見てみたまえよ、どう考えたって地位も金も持ってないおバカの君と、こんな今風の良い女が付き合う訳がないじゃないか、バカな頭で

も少しは冷やして考えなさいよ、この哀れ者が」

瞳は武崎の背中に隠れる

ガックリと膝をついてうなだれる高木

武崎「それより高木さん、アンタ、42億円の宝クジが当たったってのは本当なのか?」

高木、うなだれたままクツ、クツと笑い出す

高木「クツ、クツ、クッククッククク(肩が震える)うっふふふふふ・・・あっはははは・・・(爆笑する)うわーっはっはっはっ・・・」

たじろぐ一同

高木「(豹変) テメエらバカ野郎、頭が高えんだよコラア！
オレを一体誰だと思ってんだコラア！」

アツ氣に取られる一同

高木「下がれ！ 下がれえい！」

と内ポケットから(当たり)宝クジ券を出して両手で捧げ持つ

高木「見たかバカヤロー、42億円だあ！」

たじろぐ一同

ポケットから携帯電話を出してダイヤルする武崎

武崎「本当に当たってるかどうか今電話で確認してやる、その

券の番号を見せてくれ」

と近寄る

サツと下がる高木

高木「寄るな！ 近寄るんじゃないねえ！」

ホワイトボードのマーカーを取る

高木「今ここに番号を書いてやるからよく確かめろ！」

とマーカーで大きく組番号と6ケタの数字を書く
(94組、261325)

携帯を耳にあてたままその番号を見る武崎。
間

武崎「・・・うん、確かに当たってる！ 42億円！」

一同「おおー！（と高木に近付いて行く）」

高木「寄るな！ 寄るんじゃないかねえ、下がれ、貧乏人ども！ ぶん、何が五百万だ、さっきから聞いてりゃあチンケな話ばかりしやがって、この日の為に俺は毎年三百枚もの宝クジを買っていたんだぞ、努力は必ず実るんだ！ 分かったか、ハーツハツハツハツ・・・」

当たり宝クジ券を突き付けられてたじろぎ、あとずさりする一同

高木「ようし、お前等、平伏せ！ 頭が高い！ 平伏せ！ そうしないと一円も恵んでやらねえぞ」の野郎！」

勢いに負けてその場に膝まづく一同

高木「拝め、オレを崇めたてまつれコラア！」

アラアの神を拝む様に両手をつく一同

一同「（口々に）ハ、ハハーツ・・・」

高木「ようし、良い子だ、よし、お前等、二千円ずつ恵んでやる！」

一同「・・・」

高木「はあーっはっはっはっ冗談だよ冗談！、42億も当たっという誰がそんなケチな話をするかあ、ようし・・・五千円でどうだあー、ひゃあーっはっはっはっ・・・」

一同「・・・」

高木「お前等、よくも今までオレのことをコケにしてくれたなあ、コラ、斉田！」

斉田「は・・・はい」

高木「オレはバカか？」

斉田「はい・・・嫌、違います」

高木「じゃ何だ？」

斉田「お、おやさしい方です」

高木「ふん、よくもまあ、調子の良いこと言いやがって、まあいいや、幾ら欲しいんだ？」

斉田「あ、そ、それはもう、今は会社を救う為に、五、五百万円もあれば・・・」

高木「ふーん、そう、たった五百万でいいの？」

斉田「あ、いや、もっと」

高木「もっと？ 幾らだ、一億もあればいいのか？」

斉田「はあ」

高木「ああーっはっはっはっ・・・どうだ、オレの靴の裏を舐めろ！ 舌でオレの靴を綺麗にしたら一億やってもいいぞお、どうだ「リアー！」

膝を着いたままにじり寄り、高木の靴にむしゃぶり

つく斉田

高木「だあーっはっはっはっ・・・」

一同「・・・」

高木「他に欲しい者は」

手を上げる真紀

高木「ああくん？ 君にも随分コケにしてもらったなあ」

真紀「許して下さい、私なんでもやります！」

高木「（見て）幾ら欲しいんだ？」

真紀「一千万円！」

高木「なあーんだあ、安い安い、もっと欲ねーのかあお前」

真紀「・・・」

高木「そうだな、お前にやどうして貰おうかなあ、そうだ、フエラチオだあ！ お前が風俗でバイトしてんのは知って

んだぞお、金が欲しけりゃフェラチオしろお、どうだあ」

黙って高木に近寄り、ズボンのジッパーを下ろそうとする真紀

高木「ちょっと待て」

真紀止まる

高木「(瞳を見て)瞳！ 瞳にやって貰おう、お前はどけ！」

と足で真紀を追いやる

高木「瞳！ ここへ来い、お前は金の為ならなんでもやるんだろっ、ほら！ ここへ来てオレのチンポしゃぶってみろ！」

高木のそばへ来る瞳
しばし高木の顔を見つめる

高木「……」

いきなり高木の頬を思い切りひっぱたく瞳
怯んだ高木に一齐に飛び掛かって行く一同
あつと言う間に床にねじ伏せてしまう

驚いて目をひんむく高木
スリッパでゴキブリを叩く様に皆で高木を殴る、蹴る

高木「あいたっ！ うわっ、お前等、何するんだー！」

高木の腕を後ろ手にねじ上げる芯

高木「あいタタタタタタタタタタ・・・」

隅のガラクタの中からロープを持って来て高木の腕を縛る武崎、しごく当然の事に齊田も協力して足も縛る

高木「何をするんだお前等！ コラッ、やめろ、一円も恵んでやらないぞコリア」

高木の手をつかむと無理矢理手を開かせる武崎

高木「あっ、アいたたた・・・」

握られていた宝クジの券を取る

高木「アッ、何をする、こらあ！」

番号を確認する武崎

武崎「うん、間違いない、42億円」

高木「返せっ！ 返せこの野郎、そんなことして良いと思ってるのかこら、泥棒！」

黙ってハンカチを出し、高木の口に猿ぐつわを噛ませる齊田

高木は声を出せなくなり、これ以降は（ううう）とか（ああ〜）と呻く

齊田「この野郎、いい気になりやがって」

と蹴飛ばす

呻く高木

芯 「もういいだろう！ やめなさいよアンタ」

と斉田を引き離す

高木の頭をやさしく抱き抱える芯

芯 「大丈夫か？ ごめんなあ、殴ったりして」

おとなしくなる高木

高木に頬ずりする芯

武崎 「芯さんにはホモの気があるんだ」

暴れ出す高木

真紀 「こんなことしてどうするんですか課長」

斉田 「なんだ、君だって蹴飛ばしてたクセに」

真紀 「そうだけど・・・」

斉田 「とりあえず宝クジ券は没収だ」

真紀 「えっ？」

斉田 「た億円は皆で山分けだ！」

真紀 「！ やったあーすこいすこいー！」

と飛び跳ねて喜ぶ

梁子 「ダメですよそんなの！」

驚いて梁子を見る一同

梁子 「何を言ってるんですか課長！ 他人の当たった賞金を横取りするなんていけないに決まってるじゃないですか！」

斉田「か、貝君、いいかね、私の話を聞くんだ」

梁子「あ、あ、あなたって人は、高木さんを陥れたばかりか、
やっと当たった宝クジの賞金まで横取りして・・・」

斉田「貝君、落ち着いて私の話を聞くんだ」

梁子「嫌です、あなたの話なんか」

斉田「貝君、私は」

梁子「何だって言うんですか」

斉田「私は・・・」

梁子「何？」

斉田「私は本当に君のことを」

梁子「嘘よ」

斉田「嘘じゃない！」

梁子「嘘！ 嫌っ、いやー！ いやあああああ・・・」

引き付けを起こして叫ぶ

斉田「か、貝君、貝君！」

と梁子の肩を抱いてなだめる斉田
驚いて見ている一同

斉田「落ち着いて、大丈夫だ、もう大丈夫だよお・・・良い子
だ・・・」

と梁子を隅に連れて行き、なにかヒソヒソ話しながら
ら言い聞かせている
そして二人で何事もなかった様に無表情になってス
ーッと戻って来る、梁子は静かになっている

斉田「皆さん失礼しました」

真紀「だけど、山分けにするって言ったって高木さんはそんな
の納得しないと思うんですけど、どうするんですか？」

齊田「さあ(芯に) どうするんですか？」

武崎「この世から消えてもらうんだ、コンクリートづめにして海に沈めるか、焼いて灰を山の中に捨てちゃうんだ」

梁子「そんなあ」

真紀「そんなこと出来るんですか？」

武崎「出来るよ、オレの仕事仲間です。やってくれる人がたくさんいる」

真紀「だけど、そんな、人殺しじゃないですか」

武崎「そうだよ、だけど人だからって、皆が皆生きていた方が
良いとは限らない、皆口には出さないけど、こんな奴は
死んだ方が良くって思っている奴はたくさんいるんだ」

梁子「そんなこと言ったって・・・」

武崎「今こいつが死んでも良いと思う人、手を挙げて」

全員手を挙げる

梁子も手を挙げています

武崎「あなただって挙げてるじゃないか・・・」

驚いて手を下ろす梁子

梁子「そ、そんな、でも・・・」

(恐いわ) と言う様に齊田を見て寄り添う梁子

(大丈夫だ) と言わんばかりに梁子の肩を抱く齊田

真紀「だけど本当に大丈夫なんですか、高木さんが死んだって何とも思わないけど、犯罪じゃないですか、誰かに見つかったら全員刑務所行きですよ」

武崎「見つからなきゃいいんだ、警察に見つからなければ何をやってもいいんだ！ いいかい、よく考えて」らんよ、
今彼が4億円の宝クジが当たったってことを知っている

のはここにいるオレたちだけだ、この場で息の根を止めて、誰にも分からない様に芯さんのトラックで運び出す。こいつは行方不明になって恐らく警察には捜索願いが出されるだろう、そして警察が調べに来た時、君たちは口を揃えてこう言うんだ、彼を見たのは今日が最後だったけど、なんか最近ひどく人生のことで悩んで落ち込んでみたいだって」

真紀「つまり、自殺したことにするの？」

武崎「いや、そうはしない、自殺という設定にすると死体を調べられるし、どうしても本人の筆跡による遺書が必要になってくる、でもそれは無理矢理書かせなきゃならないし、だいたいこの手の殺人では結局残された遺書とかが手掛かりになって、バレちゃうことが多いんだ」

真紀「じゃ、どうするんですか」

武崎「うん、だから単に失踪したという事の方が良いだろう、どうだろう、高木さんは普段、ある日突然失踪しそうな

感じには見えなかったか？」

真紀「あ、それは大丈夫です、バカだけど良い歳こいて独身で、よく風俗とかクラブのお姉ちゃんにいれこんでは相手にされなくて、落ち込んでみたいですから」

縛られて猿ぐつわを噛まされた高木が、呻き声をあげて暴れる

真紀「会社では毎日この斉田課長に怒られっぱなしで、いつも泣きベソかいて陰で私たちに愚痴こぼしてました、課長の野郎、頼むから死んでくれないかなアって」

斉田「(爆笑) わはははははは……バカめが、死ぬのはお前だ、このタコが！」

と高木を蹴ろうとする

斉田を止める芯

斉田「何が死んで欲しいだ！ 私がお前のおかげで、どれだけ足を引っ張られてきたと思ってるんだ、このクソドジのおかげでえー！」

梁子「もういいじゃないですか、やめて下さい」

斉田「はい（と止まる）」

真紀「（笑い）まあまあ課長、どうせ殺しちゃうんですから」

斉田「そうだ・・・これでやっとお前の悪夢から解放されるんだ、あーせいせいする」

梁子「ちょっと待って下さい皆さん、さっきからまるで簡単なことみたいに言ってますけど、本当に高木さんを殺して、その宝クジを山分けにするなんてことが、現実に出るんでも皆さん思っていらっしゃるんですか？」

武崎「うん」

芯「うん」

真紀「うん」

梁子「課長もそう思いますか？」

斉田「うん・・・それは専門家の方が出来るとおっしゃってるんだから、出来るんじゃないのか？」

梁子「（瞳に）瞳さん、あなたもそう思ってますか？」

瞳「・・・」

斉田「何だ、瞳さん、あんたは反対なのか」

武崎「大丈夫、その娘のことは心配しないで」

武崎の側に来る瞳

瞳「金が入ったらどうするつもりだベサ、まあた一人でどこかへ行っちゃもうつもりなんだベサ」

武崎「そんなことねえっちゃ」

瞳「嘘だ」

武崎「嘘でねえ、こん金が入ったらお前は仕事はやめて、オラと一緒に暮らすっちゃ」

瞳 「本当か？」

武崎 「本当だ」

瞳 「だども、本当に大丈夫なんだべか」

武崎 「大丈夫だ、何も心配すんことなか」

瞳 「だどもこの人、死んだら怨んで化けて出たりしねえべか」

武崎 「そんなことある訳ねえぺや」

瞳 「そっかなあ」

武崎 「そうだ・・・なあ、瞳、一人7億円だド、オラとお前で

14億円だド、もう2人で一生遊んで暮らせっぞ」

瞳 「ああ・・・（笑い）うれしいなあ」

梁子 「（ずっと考えていた）そうだわ・・・瞳さんの言う通り

だわ！ 死んだら高木さんきつと、私たちのこと怨んで

化けて出ます！ 私高木さんの幽霊怖いです」

一同 「・・・」

斉田 「ふふん、貝君、今どき幽霊だなんて笑わせないでくれた

まえよ、大体いい歳をして君は」

梁子 「何がいい歳ですか！ 踏みにじられた人の思いがどんなに恐いものなのかあなたには分からないのよ！」

梁子の剣幕に驚く斉田

梁子 「こんな状態で殺されたんじゃいくらおバカの高木さんだつて！」

斉田 「か、貝君、落ち着きなさい、いいかね」

梁子 「いけないわよ！」

斉田 「私の目を見るんだ、いいかね、ここで高木君を殺したとしてもだ」

梁子 「殺すだなんて、殺すだなんて・・・ワアアアア・・・！！（引き付けを起す）」

梁子の口を塞ぐ斉田

隅へ連れて行く

梁子をなだめすかしている斉田

何やら二人で話し合っている、斉田が梁子を説得している様子である

一同気になって見ている

高木も見ている

そのうちにバチンと梁子が斉田の頬をひっぱたく

一同あわてて顔をそむける

やがて平静を取り戻した梁子を連れてスーツと戻っ

て来る斉田

梁子「私も高木さんを殺すことに賛成です、でも高木さんにあ

まりにも納得のいかない形では死んで行ってもらいたく

ありません、自分がなぜ死ななければならぬのか、自

分がいかにかに死んだ方が良い人間なのかを、バカなりに少

しは納得した形で死んで行ってほしいと思うんです」

芯「アホかよ姉ちゃん、殺されて死ぬのに納得もクソも・・・」

斉田「(慌てて) しっ!」

(いらんこと言うな、せつかくその気になったのに

)と芯に首を振って、手で制する様にジェスチャー

する

斉田「貝君、君の言う通りだ(額を拭きながら) だけど、一体

どうしたら高木君は自分が死んだ方が良い人間だと言う

ことを納得して死んで行ってくれるのだろうか」

梁子「皆でやさしく教え諭してあげれば良いと思います、高木

さんに、自分がいかにかにくだらない人間なのかと言うこと

を」

斉田「でも、高木君はバカだから教えても分からないんじゃない

のかなあ」

梁子「・・・」

真紀「こ、こ言うのはどうでしょうか、思いつきなんですけ

ど、例えば裁判みたいにして今まで斉田課長がいかに高木さんのせいで出世の足を引っ張られて来たかを証明するんです、皆の前で」

斉田「はあ？・・・」

梁子「私たちが裁判官になって、皆で高木さんの裁判をするのね」

真紀「そうです」

梁子「そうだわ、裁判して、高木さんが本当に死んだ方が良いと言っことを、立派に証明して本人にも納得してもらってから死刑にすれば良いんだわ」

斉田「だけど、そんな・・・」

一同「（顔を見合わせる）・・・」

間

武崎「分かりました、やろうじゃないですか、それであなたが

納得すると言っのなら」

斉田「でも、武崎さん」

武崎「いや、この計画はここにいる全員が賛成しなければ実行出来ない、いやむしろそのぐらいの余興は必要でしょう、おそらく皆さん殺人という犯罪に加担するのは初めての経験でしょうから」

斉田「は、はあ、それは確かに」

武崎「面白いじゃないですか、やりましょう、裁判、原告が斉田さんで被告人は高木さん、彼の死刑に反対な貝さんは弁護人、いいですか？」

梁子「は、はい・・・」

武崎「それから、君（真紀）は検察官ね」

真紀「はいっ（敬礼する）」

武崎「それから芯さん、あんたが裁判長だ」

芯「えっ？ オレが？」

武崎「ああ、一番年長者だし、見たところ一番分別がありそう

だからな」

芯 「エへ（照れて） そうかなあ」

武崎 「じゃ、まず裁判長は中央の奥」

と芯を中央の奥に連れて行き、コンピューターの箱を椅子代わりにして座らせる

武崎 「被告人はこの辺か」

と高木の足を引っ張る

武崎 「弁護人がその後で、原告はこっち側、検察官はその横ね」

とそれぞれの位置に箱を置いて座らせる

武崎 「（見て）よしと、それじゃあオレと瞳は傍聴人と言うこ

とで、「こ」で見物してるからな」

と瞳と二人、下手の方に箱を置いて座る

武崎 「それでは裁判長、どうぞ審議を始めて下さい」

芯 「はい、まず、この訴えを起こした原告より、被告の犯した罪によりあなたのこうむった被害の内容を説明して下さい」

齊田 「はい、そもそも被告の高木好助は、私の部下として配属されて来た二年前より、ことあるごとに仕事上の失敗を繰り返して、私の出世の足を引っ張って来たのであります」
芯 「その、高木さんのしてきた失敗と言うのを、もう少し具体的に話してもらえますか」

齊田 「はい、例えば船橋事件です。あれは忘れもしない4年前の4月のことです。世田谷の船橋支店からお得意さんに納品したコンピューターに故障が見つかったので、至急

代替品を届けて欲しいと言う要請があり、高木君が車に積んで向かったのですが、何時間経っても船橋支店に到着しない。高木君の方へ連絡を取ってみると場所が分からないから道を教えてくれと言つ……へんなんです、ちつとも要領を得ない、おかしいと思つたら……船橋支店と言つのは世田谷の千歳船橋にあるのですが、彼はなんと千葉へ向かっていたのです。千葉には支店なんかありません。詳しい住所を調べずに、彼は船橋と聞いて勝手に千葉に支店を作つて向かっていたのです」

芯 「高木さんが死刑だと思う方、手を挙げて下さい」

梁子 「意義あり！」

芯 「……何でしょうか」

梁子 「被告側に何も発言が許されないまま決を採ると言うのはどう言つことなのでしょうか！」

芯 「……」

梁子 「原告側の言い分だけを一方的に言わせて、被告人にはう

むを言わせず判決を下すと言つのは一体」

芯 「あのお姉ちゃん」

梁子 「お姉ちゃんではありません！」

斉田 「さ、裁判長！」

芯 「？」

斉田 「いえ、あの（汗を拭き）その、弁護人の意見にも、一理あると思うんです、その、このままでは、死刑になる被告人も、納得しないと思うのです」

暴れる高木

梁子 「死刑と決まった訳ではありませんっ！」

斉田 「（怯む）」

高木の肩に手をおく梁子

梁子「大丈夫よ、私は貴方の為に精一杯戦うわ、だから貴方も心配しないで」

感動し（うんうん）と頷く高木

芯 「しかし弁護士、ここで今被告の猿ぐつわを解いて発言を許せば、被告は泣きわめいて命乞いをするか、大声を出して助けを求めるかに決まっておりますが」

真紀「（手を挙げて）こういうのはどうでしょうか、被告の猿ぐつわをほどく前に喉元にさっきのドスを突き付けて、もし大声を出したりしたらブツ殺すと脅しておくのです」

斉田「そうか、なる程、グッドアイデアだ」

梁子「でもそのドスは誰が突き付けるんですか」

芯 「いいでしょう、その役は私が引き受けましょう」

と芯はドスを抜いて高木に近寄り、高木の後から抱

き抱える様にして喉にドスを突き付ける

芯 「良い子だなあ、おとなしくするんだぞ」

（うんうん）と頷く高木

芯 「さあ弁護士さん、取ってやれ」

猿ぐつわを解く梁子

高木「ハア、ハア、ハア・・・皆サマ、お優しいご配慮、ありがとうございます、何と皆サマはお優しい方々なのでし
ようか、私なその為に、この様な会を開いて下さって、

私は心安らかに、あの世へと旅立つことが出来そうです」
梁子「何を言うのよ、まだ死刑と決まった訳ではないのよ」

高木「いいえ、私の様な、生きていても何の役にも立たない様

なバカ者は、せめて最後に自分の命と引き換えに皆サマのお役に立つことが出来てうれしい限りです」

一同「……」

高木「私はお約束します、私はこのまま命を失っても、決して皆サマを恨んだりすることはいたしません。こんなことを話しても、信じてもらえないかもしれませんが、実は私は、今日のこの日が来ると言うことを、もう前から分かっております」

芯「何ですって?」

高木「それは、2年前に死んだ僕のおじいちゃんが、近頃度々僕の夢に現れて、近いうちに迎えに行くからなあと、お告げがあったからでございませす」

一同「……」

高木「おじいちゃんは僕に言いました。今までお前の様なアホだら狂が生きて来られたのは、周りの皆様がガマンしてくれていたお陰なのだから、皆様に感謝しなければなら

ないぞと。そして、お前には死ぬ前に皆様に御恩返しが出来るチャンスがあると仰いました。その時は何のことだか分かりませんが、今やっとそのことが分かりました。今まで私のバカを許して下さいました皆様、特に斉田課長には計り知れないご迷惑をおかけした事を心よりお詫び申し上げます。課長、今まで本当にありがとうございました。私は最後に、心ばかりの御恩返しをする」とが出来て、本当に良かったと思っております……」

涙をこらえている斉田

他の人たちも感動して涙している

真紀「ごめんなさい、今までごめんなさい高木さん、私なんにも知らないで貴方のことバカにして……こんなに、こんなに良い人だったなんて……(泣く)」

梁子「立派よ、立派だわ高木さん、ああ、貴方はなんて素晴ら

しい人なの！」

斉田「た、高木、お前って奴は・・・お前って奴はあー・・・」

高木に駆け寄って抱きしめる

斉田「俺の方こそ悪かった、今までお前のことをゴミの様に扱ってしまった、俺のことを許してくれ、許してくれよ、なあ高木ー！」

高木「もったいない！ もったいない課長（泣く）私の方こそ、途方もない御迷惑ばかりおかけして、御免なさい！ 御免なさいかちよー」

斉田「死なないでくれ、死なないでくれえ高木、高木ー！」

涙する斉田と高木

芯「（感動して涙を堪えている）ウグツ、そ、それでは、あ

らためて決を採りたいと思います、た、高木さんの死刑に賛成の方・・・き、挙手願います！」

泣きながら一斉に手を挙げる（梁子を除く）一同

高木「なんだお前らふざげんな！ やってられっかテメエらふざけやがって！ なんだよバカバカしいお前らそれでも人間かバカヤロー！ 今のは何だったんだよ今のはバカヤロー、やり直せコラァー！」

芯「それでは多数決により、死刑にするっ！」

泣き崩れる一同

斉田「高木ー」

真紀「高木さあああん」

梁子「待って下さい裁判長！」

芯 「まだ何か」

梁子 「私にはまだ、今度の事件のことで腑に落ちない点があるのです」

芯 「(うんざりして) 何でしょうか」

梁子 「それは、さっきから原告の斉田さんが言っていた、サイテック製作所のかかえていると言っ千二百万円の負債のことです」

斉田 「意義あり、裁判長、その事は本件とは関係のないことではありません」

芯 「意義を認めます」

梁子 「いいえ裁判長、これは本件に関して斉田課長が述べている重大な嘘に関することであります」

芯 「嘘とはどう言うことですか？」

斉田 「裁判長！」

芯 「弁護人は発言を続けて下さい」

梁子 「私が申し上げたいのは、そもそも千二百万円くらいの負

債でサイテック製作所程の会社が倒産したりする訳がないと言っ千二百万円のことです」

芯 「それはどう言うことですか？」

梁子 「つまり、課長の言っていた千二百万の負債を返さないと会社が潰れると言っ話は嘘だと言っ千二百万円のことです」

斉田 「ば、馬鹿な、何を言い出すんだ君は！」

芯 「どう言うことなのですか？ 原告は説明して下さい」

斉田 「弁護人の言っていることは何の根拠もない真っ赤なデータラメであります」

梁子 「データラメ何かじゃありません」

斉田 「データラメだ！」

梁子 「データラメ何かじゃないですよ！ 嘘つかないで下さいよ課長、あなたがお金が欲しいのは、私の要求した一千万を支払う為じゃないですか！」

真紀 「先輩！」

高木 「何ですか課長、その一千万って言うのは」

梁子「私が課長に要求した一千万円です」

高木「何で？」

斉田「裁判長、実はあの・・・」

芯 「あのサ（呆れて）何の話か知らないけどサ、あととはもう二人でどっか余所へ行って話し合ってくれないかなア、話がちっとも前へ進まないからサあ」

梁子「課長に私、お腹の子供を降ろして会社を辞めてくれって頼まれたから、それなら一千万円下さいって要求したんです」

斉田「か、貝君、何を言い出すんだ君は、何を血迷って今さらそんな作り話を」

梁子「作り話なんかじゃありません」

斉田「違うぞ、嘘だぞ、この女は頭がどうかしてるんだ、皆信じちゃいけないぞこんな作り話なんか」

高木「何を今さらうろたえてるんですか課長、課長と貝君が出来たことなんか皆とつくに知ってましたよ、なあ時川

君」

真紀「はい」

斉田「何！ み、皆って誰だ」

高木「だから皆です、サイトック製作所の従業員、受付のOLから営業部の全課長、部長、専務、役員、社長もぜんぶです」

ガックリと膝をつく斉田

梁子「ちなみに、私が妊娠していると言う話は嘘です」

頭からドサツと倒れ込む斉田

高木「わははははは・・・死刑はお前だあ！」

梁子「時川さんに課長とのことを相談したら、時川さんは、それは良いチャンスだからって、妊娠したことにして多額

の慰謝料を課長に要求するべきだって知恵を貸してくれ
たんです」

真紀「先輩そんなことまで言わなくても！」

梁子「ちなみに課長から要求した一千万円を無事受け取ったら、
時川さんにはそのうちの百五十万円を分け前として渡す
約束になっています」

真紀をギロリと睨む齊田

真紀「あ、か、課長違うんですあたし」

真紀に跳びかかって首を締める齊田

齊田「死刑はお前だあ！」

真紀「うわあ、助けてえ！」

真紀の首を締める齊田にしがみついて行く梁子、齊
田の首を締める
三人輪になってグルグル回る

梁子「何よ！ 人の気持ちをもて遊んだのはあなたじゃないの
よ！ エラそうにしといて本当は弱虫で臆病なクセに！
私に一体何を求めているって言うのよ！」

首を締めあったまま疲れてへたり込む様にしてその
場に崩れおちる真紀と梁子と齊田

芯 「齊田さん、アンタ、最低だな」

齊田「……………」

高木「あのオ……………ところでの、私のことはどうなるのでし
ょうか、やっぱり無罪ですか？」

真紀「……………先輩、私たちはもう、男の人には何も求めちゃい

けないと思うんです、心とか、思いやりとか、もちろんお金もです、だからやっぱり、もう一生、私たちが誰の助けも必要とせずに、自分の人生を切り開いて行けるだけのチャンスを手にするべきだと思うんです、ここは皆に協力して」

高木「と、時川君、そ、それは一体どう言うことかな、僕には君の言ってる意味がさっぱり分からないなあ」

真紀「高木さん、お願いします、ここはやっぱり、皆の幸福の為に死んで下さい!」

高木「嫌だ!」

斉田「貝君、頼む、協力してくれ、私は本当にキミのことを愛していたんだ」

梁子「アツハハハハハハ・・・わざとらしい!」

斉田「・・・」

梁子「分かりました・・・私も高木さんの死刑に賛成します、でも誤解しないで下さいよ、これは課長の為でも何でも

なくて、私自身の為なんですから」

斉田「そうか・・・分かった」

高木「ち、ちょっと待てお前ら! 何だよ自分らばかり勝手なこと言いやがって! オレはどうなるんだ、オレの人生はないのか? 何が自分の人生だ! 人のこと勝手に殺しといて・・・」

後から高木に猿ぐつわを噛ませる武崎

武崎「お前の人生はもう終わりだ」

高木「(呻く)」

武崎「さて、これで話はまとまった訳ですね、念の為に最後にもう一度決を取っておきましょう、高木さんの死刑に賛成の方、挙手願います」

全員手を挙げる

武崎 「結構です、では、そうと決まったら次は死刑を執行する方法なんです、何か意見のある人はいませんか？」

瞳 「はい（と手を挙げて）」

武崎 「はい瞳君どうぞ」

瞳 「ネクタイで首さ締める」

高木がエビ反りになて暴れもがく

武崎 「うん、オーソドックスで良いようだけど、絞殺つちゆうのはテレビで見てる程きれいなモノじゃねえんだ、被害者は死ぬ前にウンコやオシッコさもらすから、後で

そうじばすんのが大変なんだベヤ」

瞳 「そっかあ・・・んーならそのドス（芯の）で刺し殺せば」

エビ反りになつて暴れる高木

武崎 「うん、それも簡単だけどすぐくっばい血が出るサ、こりも完全にそうじサするンは大変だ」

瞳 「ふーん、中々難しいんだなあ、証拠サ残さず人に人を殺すつて言うのは」

斉田 「これはどうだろう、醤油をコップ一杯飲むと死ぬと言うのを聞いたことがあるけど」

暴れる高木

芯 「うん・・・でもそれはすぐには死なないんじゃないかなア、一晩苦しんで次の日に死ぬとか」

斉田 「それじゃしょうがないか、シヨユがない、なんちゃって・・・」

一同 「・・・」

芯 「これはどうだろう、人は一時間笑い続けると死ぬって言

うぞ」

斉田「つかまえといてくすぐるのか、それはいいかもしれませんねえ、笑って死ぬる人生なんて、ねえ」

武崎「だけど一時間もくすぐり続けるのも大変だよ、疲れるぜ」
瞳「交代でやればいいんでねえのか」

武崎「でもなあ・・・」

梁子「はい（手を挙げる）」

武崎「どうぞ」

梁子「サルにセンズリを教えると死ぬまでやると言うのを聞いたことがあります」

芯「教えるのか」

梁子「高木さんにドスを突き付けて、死ぬまでセンズリをさせるのはどうでしょうか」

高木暴れる

一同「・・・」

斉田「見たくないア・・・」

芯「ドスを突き付けられてセンズリ出来るのは本当の猿ぐらいだな」

梁子「そうだ！ もっと良いこと思いつきました・・・性風俗で鍛えた時川さんのフェラチオテクニクで、死ぬまでイカせてあげると言うのはどうでしょうか」

武崎「うん、それなら気持ちよく死ぬそうだ」

高木暴れない

斉田「何だ、お前暴れないのか？ うれしいのか？」

真紀「嫌ですよ全く、何だと思ってるんですか、死ぬまでなんて、一体何回イカせれば良いんですか、皆さん一回イカせるだけでもどれだけアゴが疲れると思ってるんですかア」

芯 「大丈夫、疲れたらオレが代わってあげるから」

高木暴れる

斉田 「やっぱり中々難しいなあ、何せ私たちは人を殺したことになるからねえ」

芯 「何か薬でもあると良いんじゃないのかなあ、多量の覚醒剤を注射してショック死とか」

武崎 「うーん、そうだなア、仕方ない、やっぱりプロに頼もうか、餅屋は餅屋と言うことで」

斉田 「いや、でもそれじゃ、秘密は大丈夫ですか？ いや、ここにいる我々は完全に共犯者と言うことで、よもや外部に秘密をもらす様なことはないと思うのですが、その、外から人を頼むと言うのはどうも」

武崎 「大丈夫、彼らもプロですからそんなことはよくわきまえているハズです」

とポケットから携帯を出す

斉田 「でもあの、報酬は？ 高いんでしょ、せつかく危険を冒して手にした分け前が減ってしまうのでは」

武崎 「(手帳を見てダイヤルする) ちょっと今交渉してみますよ」

携帯を耳に当て

武崎 「あ、東郷さん？ 武崎です、どうもご無沙汰しております。ええ、またバクリやっつてんですけど、ちょっと今急に頼みたい物件があります、ハイ、三十代後半の男です、普通の会社員で、今ロープで縛って猿ぐつわをしています。そうですね、ええ、そこまでお願いしたいんですけど、はい、いくらになりますか？ え？ はあは

あ、もう少しなんとかして下さいよ、ねえ、7がけで、いつもお願いしてるじゃないですか、ええ、じゃあ8がけで、ええ、すいませんねえ、今住所言いますね、〇〇区〇〇、〇〇ノ〇〇ノ〇〇、〇〇ビルの地下です・・・はい、はいお願いします」

電話を切る

齊田「話をついたんですか？ いくらになりました？」

武崎「四百万、これはいいでしょう、僕が出しておきます、今回は皆さんのおかげで、こんなおいしい山にもありつけましたし、あ、さっきの五百万、あれ返していただけですか」

齊田「あ、はい」

と五百万の入った袋を武崎に渡す

齊田「それで、殺し方は？ やっぱり薬物注射か何かで？」

武崎「ま、それは向こうにまかせましょう、専門家ですから、死体の処理も大丈夫です、万事上手く行きますよ、それよりも当たった宝クジの42億円の分配方法について打ち合わせしておきましょう、いいですか、最終的に分け前はここにいる6人で平等と言うことで一人7億円です」

一同「おお」

武崎「宝クジ券はサイテック製作所の社員であるあなたたち3人（齊田、梁子、真紀）が百枚ずつ共同で買っていただいたにします、誰が当たっても3人で山分けすると言う約束で、そして当たった42億円はまず14億円ずつ3人で分け、3人がそれぞれに半分の7億円を僕が設定した架空の宗教法人に寄付したことにする、この法人は僕が後から手配して設定しておきます、一旦そこへ流れてしまえばあとは闇金だ、これは僕の分野で何とでもなる・・・」

真紀「あなたって、悪い事には本当に詳しいんですね」

武崎「これで喰ってるからな、さあて、これで万事決まった、アンタたちはこの券を百枚ずつ持って」

高木のポケットから券の束を取り、3人に百枚ずつ分けて渡す

武崎「それじゃこの荷物を元通りにして全部芯さんのトラックに運びましょう、いいですか、今日あなたたちは無事予定通り我々に商品を納めた、もちろんその時高木さんも一緒にいた。そしてその後会社に戻る途中で高木さんは一人、他のお得意さんに挨拶してくるとか何とか言って姿を消したときり会社には戻らず、それきり姿を消してしまった。高木さんが姿を消す前まで一緒にいた〇〇の話によれば、高木さんは自分の失態で納品の時間が遅れてしまったことに関して、課長の斉田さんからひどく怒ら

れて、いつになく意気消沈した様子であった」

真紀「完璧ですね」

斉田「よし、それじゃあ急いで荷物を戻してトラックに積んでしまおう」

斉田と芯、それに真紀と梁子は開いたダンボール箱のフタを元に戻し、いそいそと外へ運び出して行く。縛られたまま転がっている高木の事は無視されている

真紀「(梁子に)先輩、7億円もらったらどします?」

梁子「そうね、田舎に一軒家でも買って静かに暮らしたいなあ、東京にはもう疲れたから」

真紀「私はこのまま〇〇続けます、風俗はもうやめて、借金も返して、普通の〇〇のフリして普通に暮らしながら、陰でこっそり大贅沢してやるんだあ、船で海外旅行したり

とか……」

斉田「私はこれを資本にして自分の会社を起すぞ、それでこの資金をもっともっと増やしてやる、社会に打って出る一世一代のチャンスだこれは」

芯「オレは会社を再建するよ、会社が倒産するまで働いてくれてた社員を皆呼び戻して、きっと皆が安心して働いて暮らして行ける会社を作る」

武崎の側に立つ瞳

瞳「なあ、啓ちゃん、お金さ入ったら田舎サ帰ろうよお、お父さんたち、もう首サ長くして待ってんだがら」

武崎「嫌々」

瞳「ダドももう悪いこともし納めダド、なあ、いつまでも」
げんことしとつても仕方がなかつペシ、オラと一緒に田舎サ帰って畑サたがやすベサ、なあ」

武崎「嫌じゃ、そげしたら何の為に大金サつかんだか分からねえっペサ」

瞳「オラももう田舎サ帰っておつ父やおつ母安心させてやりてえ、なあ、啓ちゃんだつてそうっペヤ」

武崎「オラは嫌だ」

瞳「何だ、やっぱス啓ちゃんオラのことから気持ちサ離れてんでねえのか」

武崎「……いんや、そげんこつはねえ」

瞳「だども、啓ちゃん最近ちつともオラの畑もたがやしちやくれんじやなかね」

武崎「なあ瞳、そげんこつは後でゆっくり二人で話し合つたらよかつペや、どげんしたつち悪い様にはせえへんのじゃきい、な」

瞳「（見つめて）うん……」

そつと肩を寄せ合う二人

2人のやりとりを見ていた高木が突然凄まじい形相で唸りだす

高木「ううーっ！ うおおおおく……っ！」

高木を見る瞳

瞳 「やめれ」

高木「うおおっ！ うおおおおく……っ！」

両手で耳を塞ぐ瞳

瞳 「やめれ、静かにしろ、おねげだから静がにしてくんろ、そじたら猿ぐつわさほどいであげっから」

高木「……」

驚いて見ている一同

高木の猿ぐつわに手をかける瞳

武崎「やめろっちゃ」

猿ぐつわを解く瞳

高木「ハア、ハア……」

高木を見つめる瞳

高木「ふふふふふ……バカだったよ、宝クジなんか当たらなきやよかった！ オレは金なんか欲しくなかったんだ！ オレはお前に会えたことが今まで生きて来た中で何よりうれしいことだったんだよ！ お前はやさしかったよ！ 会社で斉田からどんなにひどい」と言われても、

年下の〇しにバカにされても、瞳に会えたことで全部帳消しだったんだよー、早く殺せ！ 殺してくれ！ どうせオレは生きてたっつてしょうがないウジ虫だあー」

黙って高木に猿ぐつわを噛ませる武崎

声が出せなくなる高木

武崎「だがら取っちゃいげねえって言ってんだベサ」

瞳「・・・・・・」

荷物を運び終わった芯や斉田たちが集まる

武崎「それじゃ皆さん、お疲れサマでした、後のことは僕と芯さんで万事ぬかりなくやっておきますので、どうぞサイテックの皆さんはお帰りいただいて結構です」

斉田「はあ、それではどうも、よろしくお願い致します」

梁子と真紀「（口々に）よろしくお願いします」

武崎「はい、分かりました」

去ろうとする3人

瞳「待ってげろ！」

一同「？」

瞳「あっ、あたス嫌だ、この人殺すの嫌だ、警察に言うど！」

一同「（呆気に取られる）」

瞳「この人死んだらきつと化けて出っど、そスたらきつとあたしつとこへ出っど、オラこええ、オラやだど、皆汚ねえど、あたスにこん人の怨みさみんな押し付けて」

武崎「ちゃんと御供養サすれば大丈夫だベサ」

瞳「嘘こけー、オラ嫌だ、オラ皆に言うてやる人殺しだつて言うてやる」

と外へ走り出て行くとする

芯 「おい、ちょっと待ってよアンタ」

と瞳の腕をつかんで引き止める

武崎の顔をじっと見る瞳

武崎 「・・・中止だ・・・ダメ、止めよう、もういいよ、離してやんなよ」

斉田 「そんなあ、あなた、今さらそんなのないでしょう」

武崎 「だめだよ、一人でも秘密を守れない人間がいたんじゃあ話にならない」

真紀 「だ、だけど・・・」

斉田 「そんな、アンタ何とかしなさいよ、私だって何とかしたんだから、ねえ、一緒に田舎に行くって言ってあげなさいよホラ」

武崎 「・・・」

斉田 「さあ、何とか言いなさいよアンタ」

武崎 「分かった・・・瞳と一緒に、オレは田舎に帰る」

瞳 「嘘だ」

武崎 「嘘でねえ」

瞳 「嘘だ！」

武崎 「・・・」

斉田 「何だアンタだらしないねえ」

武崎 「面目ない・・・」

一同 「・・・」

間

真紀 「そ、そうだ、あ、あの、こういうのはどうでしょうか、高木さんは助けてあげるんです、その代わり、このことは絶対に誰にも話さないって約束してもらって」

芯 「そんな約束こいつが守る訳ないじゃないか」

斉田 「そっだ、後で警察に行って本当のことを話すに決まってる」

真紀 「それなら、高木さんにも宝クジの分け前をあげるんです、皆と同じ様に、どうですか高木さん、承知してくれますか？」

必死で首を縦に振る高木

武崎 「・・・まあ、いい考えだな、もしこれを本当に高木さんが承知すれば、俺達の分け前は減るが、そう7億円が6億円か、でも人殺しと言う犯罪を犯すリスクを負わずに済む」

一同 「・・・」
梁子 「もし高木さんが、私たちとの約束を絶対に守るって言う保障があるなら、私はいいわ」

斉田 「それは私も同感だ」

武崎 「瞳はどうだ？」

瞳 「・・・私もいい、殺さねえって言うんなら、私も賛成だ」
芯 「でもそれは難しいんじゃないか、一体どうやったらそんな保障が出来ると言うんだ」

武崎 「うん・・・(考える) ・・・こういうのはどうだろう、外部の誰か、そう、出来れば高木さんを含めてサイテックの皆知ってる人を選んで今ここから電話を入れる、そして高木さんに電話に出てもらってこう話してもらおうんだ。
高木さんが斉田さんたち3人と共同で買った三百枚の宝クジで2億円が当たった、それは当然4人で山分けするが、皆で話し合っってそのうちの28億円は慈善団体に寄付することにした」

一同 「・・・」

武崎 「・・・誰か高木さんと皆さんに共通のお友達か知り合いませんか？」

斉田「……(考える)」

真紀と梁子も考える

真紀「皆高木さんのことは知ってても、バカだからって誰もまともに相手にしてなかったから」

高木「……」

武崎「高木さん、あなた、御両親はいらっしゃいますか？」

(うんうん)と頷く高木

猿ぐつわをはずす武崎

高木「は、はい、まだ二人とも実家で元気に暮らしております」

携帯を出す武崎

武崎「御実家の電話番号は？」

高木「0748、42の、3758」

ダイヤルして耳に当てる武崎

武崎「あ、もしもし、高木さんでいらっしゃいますか？ 私東京で高木好助さんと友達付き合いをさせていたいです、武崎と申します。いえいえこちらこそ、あ、すいません今ちよっと好助さんと代わります」

と高木の口に携帯を当てる

すかさず芯が高木の喉元にドスを突き付ける

高木は信じられないくらい流暢に、完璧に演技する

赤木「あ、母ちゃん、うん、オレ、実はねえ、聞いて驚くなよ、仲間と共同で買った宝クジでねえ、42億円が当たったん

だよ！ うん、本当だよ！ でね、皆で話し合って42億円のうちの一億円は慈善団体に寄付しようってことになったんだ。だから一人頭の取り分は6億円だよ、うん、もちろんだよ、ああ、近い内に帰るから、うん、またね、今仕事中だから、じゃあね……」

電話を切る武崎

梁子「だけでもし、もし高木さんが、あの電話は縛られて、刃物を着き付けられて仕方なく言っただって警察に言ったらどうなるの」

斉田「！ そうだ、それがあった……」

武崎「もう後は、この人のことを信じるしかありません」

と高木のロープを解く

高木「大丈夫、信じて下さい、私絶対このこと誰にも言いませんから」

武崎「少なくとも、もうこの人を殺すことは出来ませんよ、何故なら、もうこの人のお母さんが高木さんと斉田さんたちが共同で買った宝クジで42億円が当たったということを知ってしまった。もし今日高木さんが行方不明になれば、警察はまず斉田さんたちが事件に無関係とは思わないうでしよう」

一同「……」

武崎「だけど心配はいりません、何故ならもし高木さんが本当のことを警察に話したとしても、誰も信用しないからです。それは高木さんの言うことを証明する目撃者が一人もいないからです」

斉田「そうか……なる程」

武崎「宝クジの当たり券は斉田さんが持っていて下さい、僕と芯さん、それに瞳の分け前は後で振り込み先を連絡しま

す」

武崎は当たり券を斉田に渡す

斉田「分かりました」

高木「ありがとうございます！ 本当にありがとうございます、おかげで命が助かりました・・・（泣く）ウツウツ・・・恐かったよう、オレ本当に殺されるかと思ったよう、死ぬと思うと、やっぱり死ぬのは嫌だったよ、恐かったよーウツウツ、ありがとうございます、本当にありがとうございます、ありがとうございました、皆さんに助けていただいてありがとうございます、ございましたあ・・・」

梁子「（くずおれる）ああよかった！・・・私、人殺しにならずに済んで、良かった・・・」

真紀「・・・私も」

斉田「そうだ！・・・私たちは人殺しをするところだった！」

高木「・・・せっかく皆さんに助けていただいた命です、バカは死んでも直りませんが、それでもバカなりに精一杯感謝して、がんばって生きて行きたいと思います・・・」

・

芯「武ちゃん、さっき頼んでた殺し屋の人はどうするんだ」

武崎「大丈夫、後で事情を話して断っておくから、もちろん礼はするけど」

高木「瞳、瞳どうもありがとう、やっぱりキミは優しい人だ」

瞳「勘違いすんじゃないかド、わたしはあんたが怨んで化けて出んのが恐がっただけなんだーら」

武崎「じゃあこれで、一件落着だな」

真紀「ねえ皆さん、一人6億円貰えるんですよ！ それも誰も何のリスクも負わずに！ 皆もって喜びましょうよオー！」

芯「そうだ・・・6億円だあ」

斉田「やったあー！」

真紀「わー！」

斉田「人生は素晴らしいー！」

一同声をあげて爆笑する

音楽が終わる

一同手を叩き、口々に歓声をあげながら抱き合ったり飛び上がったりにして喜ぶ

ふと真紀が、床に転がっていた宝クジの当選番号をメモした紙を見つけて拾い上げると、広げてみる

武崎「それじゃ皆さん、今日は解散しましょう、お疲れサマでしたアー！」

一同「(口々に)お疲れサマでしたあー！」

梁子「さようならあ」

斉田「皆さんお幸せにー！」

真紀は拾った紙とホワイトボードに高木の書いた当

たり番号とを照らし合わせてみる

真紀「!?!?!」

驚いて何度も紙を見返す

真紀「ちょっと待って!」

ドアを開けて出て行くこうとしていた一同止まる

斉田「何だね時川君」

真紀「あ、あのちょっと、貝先輩! さっきのあの、先輩が書き取ってくれた当たり番号のメモなんですけど」

梁子「うん?(と見る)」

真紀「あ、あの、これ(指差し)これって7ですよ、1じゃなくて」

梁子「うん」

真紀「高木さん」

高木「何？」

真紀「あの、これ」

とホワイトボードに書かれた数字の4ケタ目を指す

真紀「これって1ですか？ 7じゃなくて」

高木「へ？」

斉田「どうした？」

真紀「違うんです、番号が、あの、千の位がひとつ、私がさっき電話で聞いて、貝先輩に書き取ってもらったメモと、

高木さんがさっき自分で当たりクジ券を見てホワイトボードに書いた番号とが」

斉田「何？」

真紀「あの、さっきの宝クジ券の千の位は何ですか？」

斉田はポケットから宝クジ券の束を出し、番号を見る

斉田「1だ、千の位は全部1だぞ、このクジは連番で買ってるから千の位は全部1だ」

あわてて携帯を出してダイヤルする真紀

当選番号を聞いているうちに目玉をひんむく

あわててホワイトボードの、高木の書いた番号の下にマーカーで番号を書く（94組、267325）

高木の書いた番号は（94組、261325）

斉田「そんな・・・そんなバカな」

と辺りを見回し、壁に電話が付いているのを見て、

オンフックのボタンを押し、券を見ながら慌ただしくダイヤルする、電話のスピーカーから呼び出し音が鳴り、つながると録音された女性の声が流れ出す

女性の声「ウルトラハイパー宝クジの当選番号をお知らせします。一等、42億円の当選番号は、九十四組の二十六万、七千三百二十五番、二等……」

電話からの声は続く
立ちすくむ一同

斉田「ど……どういうことだ……」

芯「だって武ちゃん、さっきアンタ電話で当たり番号聞いた時確かに当たってるって」

武崎「すまない芯さん、宝クジは最初から当たっていなかったんだ」

芯「えっ！……でも……何で」

武崎「（ポケットから五百万の袋を出し）この五百万を取り戻したかったんだ、あの時確かに2億円が当たってるって嘘を言えば、話が違う方向へ転がって、金を取り返すチャンスがあると思ったんだ」

高木「そ、そんな、そんなバカな、オレは確かにあの時当たってたんだ」

武崎「高木さん、アンタ当たり番号を聞いた時メモを取りながら聞いたのか？」

高木「いや」

武崎「あんた目が悪いんじゃないのか」

高木「はい」

武崎「コンタクトはしてるのか？」

高木「いや、あの、さっき両方落として」

武崎「あんた視力はいくつだ」

高木「0.07」

武崎「見間違えたんだ、1と7を」

ドカーンと言う衝撃音と共に舞台全体が、まるで爆弾が落ちた様に真っ白（逆光）になり、そして次第に地獄の様に赤くなる

その場に崩れ落ちる様にしてバタバタと倒れて行く人々

斉田「なんだ・・・これは又カ喜びか・・・史上最大の又カ喜びかこれはあ！」

高木「そんな・・・番号を間違えただなんて、そんな、そんなバカなあ！」

斉田「ちくしょう、こっ・・・この、この・・・ドスバカヤローがあ！」

高木の首を締める

斉田「殺してやるっ、殺してやるうーっ！」

高木「殺して下さい！ いっそ私を殺して下さい課長ーっ」

梁子「私も殺してっ！ もう生きてたってもう、良いことなんか何にもないのよー」

真紀「ちくしょーもう2度とチンチンしゃぶらずに済むと思っただのにーっ！」

芯「地獄だっ、この世はやっぱり地獄なんだあーっ！」

瞳「ばばば、ばがやろおーっ！」

激戦の後の兵士の様に見える高木、斉

田、真紀、梁子、芯

力が抜けてへたり込んでいる瞳

武崎だけが平然としている

武崎「何もそんなに悲観することはないんじゃないのか、42億

円の宝クジが当たって、その分け前にありつけるなんて、そんなおいしい話がそうやすやすと転がっている訳はないんだ！」

斉田「ちくしょう、あんた、人の心を持って遊びやがって！」

武崎「あんたが五百万円素直に返さないのが悪いんだろう、オシは金を返して欲しかったから、仕方なく嘘をついたんだ」

芯「ふん．．．そうだな、世の中にこんなに良い事なんか、ある訳がないんだ」

武崎「宝クジがパーになったからって、誰も何も損した訳じゃないだろう、斉田課長は貝さんの妊娠してることが嘘だと分かっただけでも良かったじゃないか」

斉田「．．．．．」

梁子「．．．．．」

武崎「皆いつもの生活に戻っただけさ、時川さんはまた借金の為に毎晩会社帰りに風俗でバイト、瞳はエリートキラ」

のナンバーワンだし高木さんは一生ヒラのままだ」

真紀「はあ、あ、あ、．．．」

ドツと疲れてへたり込んだまま一言もない一同

武崎「それじゃあこれでお開きだ、先に帰るぜ、さよならっ」

と出て行くこうとする

瞳「待って、啓ちゃん私と一緒に田舎サ帰るんだべ」

武崎「約束するっちゃ、でもそりは来世の話にしてくりえ」

とドアを出て行く

瞳「何て？ ちょっと、待ってよ啓ちゃん！」

と武崎を追って出て行く

斉田の携帯電話が鳴る

ポケットから携帯を出し、出る

斉田「はい、斉田です、はい、はい、あ、あの、今まだ現場にいるのですが、はい、はい、申し訳ありません。はい！すぐ直行します、はい、すぐに！」

電話を切る

よろよろと立ち上がり、一人出て行こうとする梁子

斉田「高木君！ 午後に約束してた大友重機さんカンカンに怒ってるぞ！ 私は西丹デパートのトラブルの方に回らなきゃならないから君すぐ行って謝って来なさい、分かっ
たな」

高木「は、はい」

一人で出て行こうとする梁子の腕をつかもうとする

斉田

斉田「り、梁子君……」

梁子「離して下さい！」

斉田「でも」

梁子「もう構わないで下さい」

斉田「……」

斉田の腕を振り切って、凜として一人出て行く梁子
へへっ……と皆に照れる様に笑う斉田

斉田「梁子くん！」

と追って行く

高木、立ち上がって行こうとするが、ポケットをちよっと探り

高木「と、時川くん」

真紀「は？」

高木「電車賃が無いんだ、すまないが君五百円貸してくれないか」

真紀「嫌ですよ」

高木「(手を合わせ)頼む、急いで行かなきゃならないんだ」

真紀「もう、ちゃんと返して下さいよ」

仕方なさそうにサイフから五百円出して高木に渡す

高木「ありがとう、恩に着るよ、今度宝クジが当たったら、五百倍にして返してやるからな！」

笑顔を見せて走る様に出て行く高木

真紀「そんなのいいです！ 明日返して下さいよ、ちょっと！

高木さん……」

と後を追う様にして出て行く真紀

一人残る芯、しょんぼりしている。座り込んだまま

ウイスキーのミニボトルを煽る

武崎が戻って来る

武崎「さあ、行こうか、芯さん」

芯「……」

武崎「元気出しなよ」

芯「どうやって？」

武崎「……また一緒に次の悪い事考えようよ、なっ」

と芯の肩をたたく

武崎の手を取り、頬ずりする芯

武崎「(アセって手を引っ込める) やめろバカヤロー！ 二度とするなよ、いいか二度とするなよこの野郎！」

芯「(笑い) はは・・・冗談だよ冗談、行こうか(と立つ)」「
武崎「全くよう・・・」

芯に続いて出て行く武崎

暗転

終